



角川文庫

—2159—

若い川の流れ

石坂洋次郎



角川書店



角川文庫

若い川の流れ

昭和三十八年四月十五日 初版発行
昭和四十三年十月二十日 二十四版発行

定価八拾円

著作者

石坂洋次郎

発行者

角川源義

印刷者

中内佐光

東京都千代田区飯田橋一ノ二

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
振替東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・多摩文庫

若い川の流れ

石坂洋次郎

角川文庫

2159

第一景

六月の第三土曜日であった。

十一時半になると、K金属会社の建物の中は急に騒々しくなった。みんな帰り仕度をはじめたのである。

男の社員達は掛時計をチヨイチヨイ見上げ、煙草を吹かしながら、何かしゃべっているし、女の社員達は、代り番に化粧室に入って顔を直していた。

入社二年の曾根健助は、庶務課の自分のテーブルに坐^{すわ}って、その日の新聞をのぞいていた。空が晴れわたって、初夏の爽やかな微風が吹きめぐっている土曜日の午後、このまま下宿に帰るのもつまらないので、何か面白そうな映画かスポーツでもと思って、それを探していたのである。

「何かあって……？ 私も連れて行ってもらいたいわ」

近くに席をもっている北岡みさ子が寄って来て、健助の肩の上から、一所に新聞をのぞきこんだ。いまふりかけて来たらしい香水の匂いが漂^{ただよ}っていた。

「いえ、ただのぞいていただけです。べつに行くつもりはないんです……」

「そう。……曾根さんは、女の子につき合いがわるいって、評判がよくないわよ。みんな、誰かい人があるんでしょうと言ってるわ」

「いや。そんなことはありません。……ただ僕は、女の人と遊ぶのが苦手なもんだから……」
「女を差別待遇するなんて古くさいわよ。貴方、心の中で、すぐセックスにこだわるんでしょ……」

「僕は、女の人を、女以外のものに見ることが出来ないんです……」

「当り前のことじゃないの。困った人ねえ……」

口では困ったというが、北岡みさ子は、好意に満ちた微笑を湛えて、健助の横顔を眺めた。

やせぎすで背が高いみさ子の顔立ちは、涼しげな大きい目とうすい唇、ゆたかな耳たぶと細い鼻柱といったぐあいに、対照的な造作で、魅力ある調和を保っていた。性格もサバサバしており、そんなところを買われて、社員の組合の女子部の副委員長をしていた。年齢は健助と同じで、二十四歳だが、社員としては一年先輩で、ふだんから何かと健助に親切にしてくれていたのである。

「……すみません。つき合いがわるくて……」

「ほんとよ。わたし、みんなに、貴方を口説きおとして仲間に曳っぱってってくれて頼まれているんだわ。貴方、見かけがいいし、どこか男らしいし、女の子にとっても人気があるのよ。……一つだけお尋ねしますけどね。曾根さんは、どんな形式の結婚をなさるつもり——？」

「僕は見合結婚をするつもりです」

と、健作はすなおな調子で答えた。それからあわててつけ加えた。

「自分だけで女の人を見わかる自信がありませんから……」

みさ子は、指先きをパチンと鳴らして、顔を大げさにしかめ、

「呆れたわ！……貴方は見かけ倒しなのね。のっぽで、いい恰好かつこうの身体からだつきをして、顔だって物の分った風をしているくせに、頭の中には、明治時代のカビくさい思想を宿しているのね……。しっかりしてよ。一人前の男が、自分のお嫁さんを他人に世話してもらうなんて、恥ずかしいことだと思わないんですか。自主独立の精神で、自分の身の始末をしていけないものでしょうかねえ……」

「すみません」

と、健助はニヤニヤしながら言った。

「若い男の人が、そんな古くさい考え方をしていると、私たち女性の方でも、そのおつき合いさせられるんですからね。はた迷惑だわ……」

「北岡さんは、自分の目だけで、男性の人柄を見わかる自信があるんですか？」

「そうきかれると、ちょっとたよりなくなるわね。でも、私、いまのいままで、貴方が見合い結婚を希のぞんでいる男性だとは思ってませんでしたわ。二年間も机を並べて、貴方を見ていたくせにね。……もっと敵たかけば、貴方の中からは、もっといやらしい音おが出て来そうですわね。それを私は、貴方のハンサムな見かけに欺だまされて、貴方はなかみまでスツキリした方だと思っていたんです……」

「そのとおり、おたがい、異性の中身は、なかなか見通せないものですよ。どうです、貴女も見合い結婚に宗旨しゅうしを変えられたらいかがです……」

「ぶつわよ！」

北岡みさ子は、ぶつ代りに、健助の肩に手をのせて軽く揺すぶった。

「皮肉だけは一人前に言えるんだから、憎らしいわ。……まあ、いいわ。考えようでは、貴方がそんなに女を敬遠するのは、貴方の周囲にいる私達に、貴方を、狭いカラからひっぱり出す魅力がないということにもなるんでしょうから……。もし、何かで、貴方の思想が変ることがあったら、私達と遊んで下さいね……。あっ、そうだわ、忘れてた……。さっき専務さんに廊下で会ったら、貴方に、帰る前に専務室に寄ってくれて言っていましたわ。何か頼みたいことがあるんだって……」

「僕に……。何だろうな」

「すぐいらっしゃいよ。お昼になるわ」

「ああ」

健助は、上衣に腕を通し、蝶ネクタイの曲りを直して、廊下のつき当りにある専務室の前に行き、ドアをノックした。

「お入り」

白いもののまじった豊かな髪をきれいに分け、健康そうなあから顔をした川崎専務は、スポーツシャツに着かえて、廻転椅子をギイギイさせながら、若い社員達以上に腰の浮いた感じで坐っていた。テーブルの上には、ゴルフのクラブが一本のっており、これからゴルフ場へ出かけるつもりらしい。

「遅くなりました。どんな御用でしょうか？」

「君、これからまっすぐ下宿に帰るのかね。それともどこかへまわるのかね」

「べつに……。プロ野球のいいカードがあればと思ったんですが、今日のは大したこともないようで……。下宿に帰って、庭の手入れでもしようかと思ってたんです……」

「そうか。それだったら、お気の毒だが、途中工場で下りて、儂わしの家にこの包みを届けてもらいたいんだ。儂には大切なものだから、必ず、家内かだいか、家内が不在だったら娘に手渡してもらいたいんだ……」

川崎専務は、テーブルの端はしにのっている四角な紙包をとって、健助の方に差しのべた。

「はあ。では、お届け致します」

「すまん。……君、土曜日の午後だというのに、デートでもしてるんじゃないのかい？」

「いえ。僕はそんな趣味しゅみがないんです。一人の方が……あるいは男同士の方が、気楽なもんですから……」

「ハハハ。……儂等わしらの年齢になると、君の言う通りなんだが、君のような若さで、よくそれで通していけるな。若い女の子をきれいだと思わんのかい？」

「思いますが……思うだけで、それ以上のことは大儀たいぎなんです」

「若い男がみんなそう怠け者じゃ、若い女の子が失望するだろうね。女の子は、男がみんな適当にオオカミであることを希ねがんでいるものなんだ」

川崎専務が、北岡みさ子と同じことを言うので、健助はふと可笑わしくなった。

「まあ、いいさ。今日はとりあえず、この品物を届けてくれ給え。家内か娘に手渡すのを忘れ

ないでな……。地図は名刺の裏にかいてあるから……」

「それではたしかに——」

と、健助は、四角な紙包を大切に抱えて、専務室を出た。

川崎専務は、会社の往復には自動車を使っていたが、どうかすると東横線の電車を利用することもあり、健助はときどき電車の中で顔を合せることがあった。すると、川崎専務は、自分の方から気さくに傍に寄って来て、健助になにやかやと話しかけた。健助とかぎらず、会社にいる時の様子をみても、若い者と話をするのが気分的に好きなようだった。また、若い会社員達も、物分りがよくて実行力のある川崎専務を、重役の中では一ばん信頼していたのである。

もちろん、川崎専務と曾根健助は、世間普通の重役と新米社員の関係だけで、それ以上の特別な交わりがあるわけではなかったが、しかし健助は、ふだんに信頼している上役から、個人的な用事を頼まれたということ、なんとなくいい気分になっていた……。

往来に出ると、陽がカンカンに照っており、眩しいほどに明るかった。並木の柳の枝が、微風に吹かれて、爽やかにそよいでいた。勤め帰りの女達は、もう半袖の夏の軽装をしている者が多く、見るからに涼しげだった。

「曾根さん、お帰り？……なあに、その大きな箱は——？」

横を歩いていた四、五人の女連れのグループの中から、北岡みさ子が寄って来て、健助に話しかけた。

「やあ。……専務さんに、これ、自宅に届けてくれて頼まれて、やっぱり僕、おつき合い出

来ませんでしたよ」

「そう」

と、みさ子は手をのぼして、健助の抱えている荷物にさわり、妙な微笑を浮べて、

「何でしょう。固い、わりと重いものだわ。千円紙幣きさつの束かも知れないから、大切にもっていらっしゃい。……私達、暑いもんだから、そのビヤホールでビールを飲んでいきましょって、話がきまったとこなの。貴方を誘いはしないわ。……川崎専務の奥さまって、御自分もきれいだし、万事にきれいな好きの方ですから、貴方も形を崩くずしていいってほだめよ。どれ、私がみて上げる……」

みさ子は、健助の腕をつかんで身体をまわすようにしながら、身なりを点検てんけんし、

「まあ、辛からうじて及第だわ。……奥さんの前で、さっきのような古くさいことを言うと、愛想あいそをつかされますから、あまり混み入ったお話をしない方がいいわ」

「御忠告ありがとうございます……」

健助は、北岡みさ子や彼女の仲間のくすぐったそうな笑顔に見送られて、足を早めて地下鉄の入口に急いだ。

渋谷で東横線に乗り換えて、T駅で下りると、健助は地図を頼りに、ゆるい坂道をのぼって、閑静な住宅街の一面に出た。

川崎専務の家は、角屋敷かどやしきになっており、大谷石おおやいしを積んだ上に土を盛って、じんちゅうげやつつじを植えた垣根かきねが、ひろい屋敷を囲んでいた。屋敷の中にも緑の樹木が多く、街なかとちがって、

ここらでは空気まで甘いように感じられる。

健助は、みさ子の言葉を思い出し、ネクタイや上衣の工合を直してから、玄関の呼鈴を押した。と、四十年配の女中が出て来て、健助が用件を言うと、

「奥さまはさきほどお出かけですけど、お嬢さまでしたらいらっしゃいますから……。ちょっとお待ち下さいまし……」

健助は、ここに来るまで、川崎専務の夫人が留守だということは考えてなかったので、また苦手の若い娘にもの言うのかと思うと、少しばかり気が重くなった。

なにか歌を口ずさむ声と、跣で廊下をヒタヒタ踏む音がしたかと思うと、髪を柔かく垂れた、色の白い面長な顔の娘が、敷居につかえそうな感じで、玄関の間に姿を現わした。長い脛をむき出して、跣で畳を踏んでいた。

「曾根さんでいらっしゃいますのね。私、川崎の娘で、ふさ子と申します。……さきほど、父から電話がありまして、貴方がお出になることは分っております。……暑いところを御苦労願ったんだから、何か冷い物を差し上げるようにということでしたから、どうぞお上がりなすって……。庭にいろんな花が咲いてきれいですから、ちょっとでもごらんになっていって下さい。……さあ、どうぞ……」

ふさ子という娘の言葉には、カラのお世辞でない率直な調子があったので、健助もわるびれずに家の中に上がった。廊下を曲って案内されていくと、南側に和風の座敷が並んでおり、その前が広いベランダにつくられて、藤の椅子とテーブルが置かれてあった。健助はそこに坐らされた。

ひろい庭は一面に芝がしかれ、西側には花壇^{かたん}がつくられ、南側と東側には、さまざまな樹が植えてこまれてあった。花壇はバラとつつじとあやめの花ざかりで、さまざまな形と色の花が、明るい陽を浴び^あて、まるで幻影でもみてるように美しく咲きはこっていた。

芝生のまん中には、水まきの噴水^{かんすい}がクルクルとまわっていて、小さな虹^{にじ}がかかっていた。室の中は、夏向きに調度^{ちようど}も少なく、キッチンと片づけられていた。

（人間はこういう所でふだんの暮しを営むべきだなあ）と、健助は思った。

ふさ子は、女中に冷いビールを運ばせた。向い合せに坐られてみると、上背^{うおせい}があつて、胸も厚く、目が大きく美しく、物腰も落ちついており、ここにも豊かな野の花が咲き出たようで、健助は押されるものを感じた。野の花を考えたのは、ふさ子が裸の長い脛をむき出しているのが、いやでも目についたからである。

健助は、すすめられるままに上衣をぬぎ、ビールを飲み、それから庭を賞^ほめたりしてから、ふと気がついて、川崎専務から預った紙包をテーブルの上に差し出した。

「専務からお預りした品物はこれなんです。大切なものだから、奥さまか貴女^{あなた}に必ずお手渡しするようになっていうことでした」

「どうも御苦労さまでした。……重いわ。大切なものって何か、あけてみましようね」
ふさ子は、健助の方を見て、意味ありげに微笑して、紙包みの紐^{ひも}を、手をさしこんでプツプツと切った。

（力があるな）

と、健助は思った。包みをとくと、中には紙箱が入っており、それを開くと、青かびの生えた古いドタ靴が一足出て来た。

「これが大切なものですって……。アハハハ……」

と、ふさ子は可笑しそうに笑って、くつぬぎの石の上に、靴をほうり出した。健助はあっけにとられて、ドタ靴とふさ子の顔をかわるがわる眺めていた。

第二景

「パパもどうかと思うわ。こんなものを曾根さんにもたせてよこすなんて……」

「専務は、これはたいへん大切なものだから、必ず奥さんか貴女に手渡しするようにと仰有ったんですが……。カビの生えたその靴は、専務にとって、何か思い出のあるものなんですか……」

そう尋ねる健助の真面目くさった表情を見て、ふさ子はもう一度、声をあげて笑い出した。上体を少しのけぞらせ、白い歯並びをあからさまにみせて、まったくこだわりのない笑い方だった。「そんなドタ靴、大切なものである筈がないじゃありませんか。靴でなくて何でもいいんです。大切なのは……その品物を、貴方が私に手渡ししてくださるということなんです……」

「はあ。それはどんな意味なのでしょうか……」

「つまり、貴方と私が、顔を合せる機会をつくるということなんですわ」

「それでしたら、ボロ靴の包みを届けさせなくても……専務がここに僕をよびさえすればいい筈です……」

「それでは不自然になると思ったんでしょ。……曾根さん、なんにも御存知ないらしいのね？」

「はあ、何でしょうか？」

「ガッカリするわね。……私はここの家の一人娘で、去年ごろから、両親が、私のためにお婿さんを探しはじめてるってこと、御存知ないんですか？」

「それはお目出度うございます」

と、健助はすなおにお祝いを述べた。

（もしかすると、このあいさつは的外れかな）と思わないわけではなかったが、つい、そう口走ってしまったのである。

ふさ子は、苦笑しながら、健助の顔を眺めて、

「おめでとうはまだ早いと思いますけど……。父はね、この男ならどうだ、という含みで、貴方をここによこしたんですわ……」

「それは……どうも……」

健助は、細い鞭でピシリとたたかれたように、はじめてある感じをもった。と同時に、目の前に坐っている、胸の厚い豊かな肉体を、水色のワンピースで包んだ、目が美しいふさ子の存在が、急に、こちらにふくれあがってくるような圧迫感を覚えて、思わず庭先きに目を外らせた。

ひろい緑の芝生が、日光をふんだんに吸って、濡れたように冴えた色をみせている。花壇の中の目立って大きい真紅しんくの一輪のバラの花が、なにかの象徴しやうちゆうのように、健助の心に沁しみみこんだ。

「曾根さん、御不快でしたらどうぞお帰り下さい。父や母に悪意はないにしても、貴方を欺だましていることに変わりありませんから……」

「いえ、ちょっとばかりドキンとしましたけど、べつに不快に感じてはおりません。……貴女が正直に教えて下さったんですから……」

「今年に入ってから、貴方で四人目ですわ。もっとも、こうして家の中に上ってもらったのは、貴方がはじめてですけど……。なぜかって言いますと、ほかの三人の方は、なんでここの家によこされたのか、ちゃんと察さしていて、はじめからちょっと気どった恰好をしていましたので、私、玄関だけで帰っていたいただきました……。貴方は何も御存知ない様子だったので、すまない気がして上っていただいたんです……」

「前の三人というのも、みんなうちの社員ですか？」

「社員の方もありますし、そうでない方も……。お名前は申し上げられませんが……。父はあれでいたずら好きですから、一人の方など、重い漬物石つけものいしのような石ころを紙に包んだのを持たされて来た方もありますわ。玄関に出てみたら、その方、額ひたいにビッシヨリ汗をかいていましたの。わるいわ……」

わるいと言いながら、ふさ子はおかしそうに思い出し笑いをしていた。健助には、どうも、ふさ子の言っていることが、実感としてピンと来なかった。

「わかりませんなあ。貴女のように、いろんな条件に恵まれ、ハッキリした御自分の考えをもっている方が、どうして結婚の相手を自分で見つけようとされないのか、僕には合点がてんがいかないんですけど……」

「さあ……。恋愛という情熱を信用しきれないのかも知れませんわ。……でも、そう言えば、こちら側の調査ちやうさによりますと、曾根さんも現在恋愛していらっしゃらないし、また女性とのおつき合いをあまり好まないということになってるんですけど、それこそいろんな条件に恵まれていらっしゃる曾根さんが、どうしてそうなのか、私にもピンと来ない気がするんですけど……」

ふさ子のいたずらっぽい目つきで見つめられると、健助はどぎまぎして、思わず顔を赤らめた。

「そんなこと……調査なすったんですか？」

「ええ、両親が一生懸命に調べておりますの。ほかに、両親が私のお婿さんの候補者こうほしやの条件にしていることは、いろいろありますわ。例えば、見かけがさっぱりしてること。それから、私と結婚すれば、まず暮しの心配はありませんから、他人をかき分けてすすむような生活力はなくてもいい代り、奥さんの尻しりにしかれるような温厚おんこうなタイプの青年であること、などですわ。奥さんて、もちろん将来の私のことなんですけど……」

と、ふさ子は人ごとのように言ってニコニコ笑っていた。健助はムツとした調子で、

「僕が……尻しりにしかれる人間だなんて……勝手に決められては困ります」

「たぶん、こちら側の調査がまちがっていたんですわ。きつと……」

と、ふさ子はちっともわるびれた様子をみせなかった。